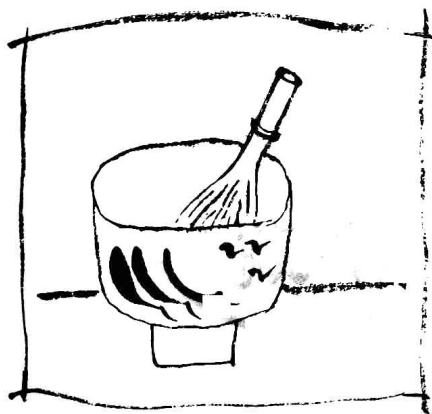


周作快談

遠藤周作

快談

遠藤周作



周作快談

定價 四八〇円

昭和四十九年四月十日 印刷
昭和四十九年四月二十日 発行

著 者 遠藤周作

編集人 浜田琉司

発行人 朝居正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒四五〇 名古屋市中村区堀内町
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

印刷 図書印刷 製本 田中製本

0095-500225-7904

周作快談・目次

わが青春に悔なし（佐藤愛子・楠本憲吉の巻）	3
いけの棒対でくの棒（池坊保子の巻）	49
前世に夫婦だった私たち（北條希功子の巻）	89
若いっていいなア（三笠宮寛仁殿下の巻）	127
便学にいそしんで候（中村武志の巻）	173
勝つことこそわが人生（金丸銀三の巻）	209

装帧
カット
秋野卓美

この対談集は、『小説サンデー毎日』誌上に
昭和四十八年八月号から四十九年二月号まで
連載されたものです。

わが青春に悔なし

佐藤愛子・楠本憲吉の巻



こんどの対談は計算ちがいだった。中学時代同級生の楠本憲吉と近所の学校に行っていた佐藤愛子とに来てもらって、戦中派の少年少女時代の悲しさ、辛さをシンミリ語ってもらうつもりだったのに、この二人、何を間違えたのであろう、小生のその頃の耻多き行動ばかり語っており、司会者の意志は無視されたのである。私だけがいかに紳士的であったかは、読む人にはおわかりでしょう。冒頭の三千円問題から……

実費を払うから見舞いの花束を……

(佐藤愛子さんは遠藤氏と向き合うなり)

佐藤 あんた、お金を返してよ。

秋野 どうしたんですか。

周作 おれがね、お手伝さんの立話を聞いたわけよ。それが「うちの旦那は、一声叫ぶと女優さんが集まってくるなんて偉そうなこといつてるくせに、こんど骨を折っても女優さんから花束一つこないの」と陰口しているのを聞いたわけよ。それで佐藤愛子のところへ電話して「君は僕の長いあいだの友達だろう。ひとつ助けてくれんか」といったら、早くも不安の声を浮かべて、「なによッ」というわけだ、例によつて。「実はいまお手伝さんに馬鹿にされかかっているの、君はすまんが、実費は僕があとで払うから、松坂慶子の名前で花束を僕に贈ってくれんか」というわけ。そしたら彼女「花屋に電話をかければ電話賃がいるけれども、実費の中にそれを加えて払うか」という。お友達としてなんてあさましい、たかが十円だろう。

佐藤 アハハハ(笑)。

周作 「払う」というたですよ。夕方になったら松坂慶子という花束がきましたよ。今日、その実費と電話賃を払わにやららん。「本当に松坂もなあ、すぐ贈ってくるわ」っていつてね（笑）。

そしたら本ものの吉永小百合が、石坂洋次郎先生のところに電話したら、遠藤君が女優から花束がこないの、あるスポンサーからきた花束を、さっそく三田佳子なんていう名前にすりかえているということだから、君、かわいそうだから贈ってやりたまえといったら「岡田小百合」というのを贈ってきたよ（笑）。

佐藤 早く返してよ。

周作 いくらかかった、あの花。

佐藤 （大声で）三千円！

周作 おのれの見舞いの花をだな、おのれが買うて、おのれのために……ふん、情けない。（ブツブツいいながら財布を取り出し、中には一万円札一枚しか入っておらず、ボーイさんに両替を頼む）

佐藤 それ一枚でもいいわよ。

ものすごく原稿が詰まっていたとき電話がかかってきてね。でも気になって、呉服屋がちょ

うど勘定取りに来たからそれに命じたのよ、花屋に行くように。ペンペン草でもなんでもいいから一番安いのでいいって。

周作 ペンペン草！それで三千円取るのかよ。千円じゃないか、あんなもの。

佐藤 いやいや、領収書があるわ。

周作 まあいいけどさ。

佐藤 私にしか頼めないでしょう、あんなはずかしいこと。なにしろいろいろとね……。

周作 いろいろ金がかかるんですよ。

それじゃ三千円。どうもありがとうございました。（と渡す）電話賃は。

佐藤 電話賃じゃないわよ。呉服屋に行かしたから、そのために反物の一反か二反買わなければならなくなっちゃったのよ。

周作 ひでえ、そんなあ。鬼ババア。

（楠本憲吉氏出席）

周作 今日はお互いに気心もわかっているお二人との対談なので、お互い悲しい運命を、悲劇を喜劇の額縁に包んだ対談の味を出したいというのが私のねらいなんです。そこでお二人にご協力を願いたい。

佐藤 結構ですけども二人ででたらめをいわないでよ。

周作 私は悲劇的な役割をするから、あんたたちお二人はちょうどふさわしい喜劇的な役割をやってもらいたい。

佐藤 なーにが、反対なんじゃないの（笑）。

はじまる前にちょっと聞くけど、お二人とも口から出まかせのホラ吹くけど、あのもととはどっちなの。

周作 友を前に置いていうけど、楠本はだいぶ脚色が多いよ。少なくとも二つ脚色している。一つは、おれが佐藤愛子のカバンの中にラブレターを放り込んだというんだけど、おれはその覚えはまったくない。

もう一つは、おれがそのころから小説家を志していたというのもまったくデタラメ。おれはあのころ勉強できへなかった。

楠本 円歌の「山のアナ、アナ……」という落語のものは、本当に短い。それが五百回、六百回やっていくうちにだんだん長くなって、それが……（笑）。

なぐられるために学校へいった

周作 楠本はあちこちの講演の枕として使って、だいぶ稼いでいるじゃないか、おれと佐藤愛子のことだ。

佐藤 だけど楠本さんがでたらめをいうようになったのは遠藤さんの影響を受けたからなんでしょう。

周作 影響受ける男かよ（笑）。

私と楠本憲吉とは灘^{なだ}中いうて、いまの灘高。東大ばかり入るような教育をするくだらない学校の卒業生ですが、あのころは本当に選りすぐったものだけを集めておった。

佐藤 もうそういうふうにてたらめいうじゃないの、すまして。あのころは神戸一中を落っこちたのがいく学校だったじゃないの。

周作 社会事業ですよ、あのころは。だから小説家になるやつとかなんとかを……。 （だんだん力なく）

甲南女学校は阪神間のお嬢さんのいく学校だったの？

佐藤 そうね。

楠本 単なるお嬢さん学校でなしに、かなり優秀なのがいったです、一番、二番、三番くらい。

周作 それも佐藤愛子を見ていたらちょっとおかしい感じがするけれどもね。

楠本 ちょっとおかしいけどね。

佐藤 ウフフフ（笑）。先生は生徒を淑女とみなしましたね、あの学校では。だからやたらに怒ったりなどしないのよ。

周作 それに比べて灘中は、先生は生徒をなんと見なしておったんだ、あれは、エエッ。犬、猫と見なしておったんとかうか。

楠本 （遠藤氏をさして）この人は、幾何の先生が黒板で使うでっかい定規で針がついてるのでぶんなぐられて、死にそうになってね。あのころ暴力なんて平気だったね。定規を取りあげたらさらに怒られてね。

佐藤 どうして？

周作 （声を張りあげ）毎日僕は学校になぐられるためにいったんです。

楠本 この人はまた悪かったんですよ。

周作 あのところ私は、この世になぐられるために生まれてきたのではないかと思っていた。

楠本 僕が一番覚えてるのは、幾何の試験で「三角形の二辺の和は他の一辺より大である。

三角形の内角の和は百八十度である。これを証明せよ」というのを、遠藤は答として「まったくそうである。そのとおり。僕もそう思う」と書いた（爆笑）。「なんやこりゃーッ、遠藤周作前に出てこいッ」パチーンよ。「おれもそう思う」なんて書かれたら、そりゃ教師として怒りますよ。

佐藤 痛くなかった、なぐられて。

周作 痛いよーッ。だからこんど骨を折って普通のやつはヒーヒーいうのをおれは四日目で働いている、当時灘中で毎日なぐられていたから、痛みに対してなれておるからだ。

もっとも習字のときでも、みんな一生懸命書いているのに、教師が、「おい遠藤、習字持ってこい」といったらおバケの絵しか書いてないもの、そりやなぐるわね。

佐藤 痛いからなぐられるようなことはやめようと思わないの。

周作 無意識のうちにやっちゃう（笑）。

佐藤 二人は同じ組でしょう、D組の。

楠本 CとDを繰り返したわけです。

周作 C、Dというのは成績の悪いやつが入る組なんです。

楠本 この人は非常に悪かった。

たとえば先生が「遠藤、教科書を読め」というと「はい」と読まない。「なぜ読まないか」
「黙読しています」(爆笑)。

銃に剣のつけ方がわからなかった

周作 キミ、今日は僕が司会者ですからね、司会者の、指図なしに勝手な発言はやめてくれ
たまえ。

楠本 都合が悪いからね、いろいろと。

周作 佐藤愛子は成績優秀だったの。

佐藤 ううん、中の中ぐらいかな。

周作 中ぐらいか。頭はあまりよくなかったんだな。

佐藤 頭はよかったけど勉強しないんです。

周作 (苦笑して) そんなら、おれと同じようなものだ。勉強は面白くなかったね、あのこ

ろは。

佐藤 ろくな先生がいらないんだもの。教師の教え方がだいたいになってないね。

周作 教える内容がそのころはつまらなかったね。そろそろ戦争の足音が忍び寄ってきていたし。

佐藤 私なんか二年のときに日中戦争がはじまったんだもの。

周作 僕らはやがて上級学校を受けてそのあと兵隊へいったんだけど、あなたたちは、女学校を卒業すれば軍国の花嫁にならなければならなかったわけでしょう、だいたいにおいて、そのころからそういう戦争の感じを、お互い持たされていたね、学校の中で。

佐藤 そうよ。だって私たちは分列行進とか、そんなことばかりやっていたもの。私は、第一分隊長でございましたね。（胸を張って）

楠本 ホーッ！

佐藤 小隊長になりたかったけれどもならしてくれなかったの。教練なんかあったでしょう。周作 オフ・コース。教練で一番優秀だったのがワタクシです。

佐藤 そんなわけないわよ。（言下に否定され、相手にされず）そりや惨憺^{さんたん}たるものだったでしょう。

周作 (蚊のなくような声で) そりゃそうだ……よくわかるなあ。

佐藤 聞かなくなつてわかりますよ。

楠本 この男は銃に剣のつけ方がわからなかった、いくら教えてもらても。

佐藤 そんなにむずかしいの。

楠本 いや、簡単ですよ。ア HOW でもできる (笑)。

周作 そのたびごとにたたくわけですよ、教官が、退役曹長の。そしてその上の配属将校も僕をたたくわけですよ。

ある日、放課後、偶然、門を出ようとしたら銃器庫に配属将校が入っていて、銃の番号を手帳かなんかに書いているのが見えたわけですよ。そしたらその戸口のところに、幸いなことに南京錠がそのままぶら下がっていたわけですよ。僕はその前を通りかかって、無意識のうちに戸を締めまして……。

佐藤 なんて無意識なのよ。

周作 それはドストエフスキーのラスコリニコフ的犯罪ですな。

無意識のうちに南京錠がカチッとかかって、そのまま私は家へ帰ったのです。それから聞くに、一時間くらいいじめき叫んでおったらしいね、配属将校は、ガンガンたたいて。しかし生徒